
東方御伽草子

ナナツボシ(牙狼新シリーズ放送開始!!)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方御伽草子

【Nコード】

N4962X

【作者名】

ナナツボシ（牙狼新シリーズ放送開始！！）

【あらすじ】

東方の短編集（予定）

幻想郷の人里にある屋台を通じた人間模様。とくに戦闘も弹幕もなく、幻想郷に住まう者達の「コマを切り取ったお話です。作者の嫁を中心に、まったり更新予定です。

リハビリがてら書いてみた東方小説です。子育ての合間の息抜

きなので、メインの連載どないやねん！と言つ至極当然なツッコミは勘弁して下さい。

ある兎の話

ここは幻想郷と言つ。

ここに住まう存在は、妖の類い、妖精、幻獣　つまりは我等人間が生まれ、人生を営み、そして朽ち果てる間に備わる常識から外れた存在である。

要は人間が娯楽として接する創作物　昔話、絵本、小説、映画などの所謂フィクションの世界に存在しうる者共が当たり前のように営みを形成しているのだ。そして少なからず人間も含まれる。

この場所の管理者と言つ存在は、やがて完全なるフィクションになる前に、全ての”現実”に”存在している者達を箱庭に隔離したのだ。故に箱庭の外に住まう人間にはフィクションの中の創作物だとて、現実に存在しているのだ。

それが幻想郷なのである。

東方御伽草子

ここは幻想郷の中にある人間達の集落である。それなりに人が住み、それなりに栄えており、そしてそれなりに物語が生まれる場所である。

夕暮れの通りには様々な商店が立ち並び、道行く者達に威勢の良い声飛び交う。あちらでは惣菜を、こちらでは野菜売りがダミ声を飛ばす。

辻売りの八つ目鰻の屋台には既に出来上がった酔っ払いがクダをまき散らし、場違いな西洋風な使用人服の女が冷やかな視線で通り過ぎていく。

ここには確かに営みが存在していた。ただ、それは人間に限らずと言いつつ注釈がつくのであるが。

ひとつ間違いないのは、ここには調和があるという事であった。

4

さて、この人里の入り口付近の薄暗い場所に、少し中にある屋台とは趣の違う店があった。

店構えは屋台なのだが、周りに何も無い場所にぽつんと建っている。

この人里を纏める立場でもあり、人格者である寺子屋を営む女性に言わせると、こんな危ない場所に出店など正気の沙汰ではないらしいが、無愛想で有名な店主は一向に聞きはしないのである。

その屋台の名前は「喰いものや」と言うなんのひねりもない暖簾を掲げ、半年前あたりからひよっこり現れた。

気が付いたらそこに在り、気が付いたら当たり前前に馴染み、少なからず常連が付いている。

これはそんな不思議な屋台にまつわるおはなしである。

「だからさあ、あたしだって頑張ってるのよ！ねえ聞いてんの？無視すんなオヤジのくせに！悪いと思ったら……ひつく、賽銭いれに來なさいよ！……あ、おかわりちよーらい、ひひっ……」

「黙れ不良巫女……ツケ払ってからいいやがね。……おらっ熱爛だ」

「んふ〜おやつさん好き〜ひつく」

「ちっ……調子いい奴め……忌々しい……俺はまだ二十代だ馬鹿野郎」

どうやら今夜の客は店主曰く不良巫女だけらしい。赤いリボンが麗しい巫女がへべれけになっていた。

テーブルに突っ伏したまま酒を呷る巫女姿の少女を眺め、店主の男は洪面にキセルを啜えていかにも迷惑そうに唸っている。

ただ、文句を言いながらも酒を出す辺りは説得力にかけろのだが。

「おっちゃん、なんか喰わせてくれよ！お、霊夢は出来上がったんな！」

「ちつ……またすかんぴんがきやがった。おらっ、飲め。そしてツケ払え」

「そういつても喰わせてくれるおっちゃんカツコいいぜ！愛してる」

「阿呆が。喰ったらこの不良巫女連れて帰れよ。胡散臭い魔法使い」

巫女に続いてとんがり帽子の白黒な少女が飛び込んできた。店主と軽口を交わす辺り、この娘も常連らしい。

こうしてこの屋台の夜は更け、それなりに人が入れ替わっていくのである。

最後の客が機嫌よく立ち去り、店主は屋台をたたむ準備を始めた。店主は伸びを一つしながら釣り銭箱を覗き、そして深いため息をついた。どうやら今夜も赤字らしい。

「……あの腐れ巫女」

ぼつりと悪態をついた店主は、釣り銭箱の中から一枚の紙を摘みあげて忌々しそうに丸めて捨てた。紙にはこう書いてある。

博麗神社と

それでも一日の労働に心地よい満足感があるのか、店主は少しだけ微笑して片付けに戻るのだった。

「ふう……こんなもんか。さて、労働のご褒美つと……」

一通り片付けが終わった店主は、にんまりとしながら豆腐の炒ったものと熱燗を自分の為に用意し、遅い夕食を摂るようだ。

「今夜も月は綺麗だね〜つとくらあ……ん？また来たのか兔」

店主が座るテーブルから見える木陰には、外の高校生のような制服を着た兔の耳の少女が立っている。

「あ、あの、ごめんなさい、えっと、通りかかっただけで、その」

「おい兔、腹減ってないか？」

あわてて支離滅裂な兔の少女に店主は声をかける。

「えっと、その、はいっ、減ってるかと聞かれたら減っていると答えますが、その、はい、いえ、ごめんなさい」

「……こっちこい兔。寒いだろうからなんか温かいの作ってやる」

「あの、いえっ、だから、その」

「……来い」

「ひゃいつー！」

わたわたと挙動不審な兔の少女に、店主の優しい一喝が止めを刺し

たらしい。兎の少女はおどおどと、そして素晴らしい速さでテーブルについた。

席についたものの、兎は銅像のようにお行儀よく固まったまま、愛らしい耳を垂らして俯いていた。店主はそれを横目で見ながら鍋を振っている。

とんっ

やがて兎の前に、食欲をそそる湯気がたち登る丼が置かれた。

「食べな。暖まるぞ」

店主を上目にちらりと見た兎は、すぐに慌てて視線を逸らす。ただ、小さく可愛らしい鼻はひくひくと、湯気に混じる美味しそうな香りに反応している。

井には何かの腸詰めと、武骨に乱切りされた人参や芋の類いが煮込まれた汁が入っている。

「ポトフってんだ。暖まるから遠慮なくやりな？」

「は、はひっ、あ、ありがとうございます」

「いいから慌てないで食べ。俺も夕飯食うからな。慌てないで食べ」

「……………はい」

「ん」

相変わらず顔は伏せたままだが、兎はやがて確りと頷き、そして食べはじめた。

幻想郷は今春先である。だが、夜半はまだまだ冷えるのだ。兎が食し、ほう、と吐く息は少し白い。

店主はすっかり冷えた銚子の酒を手酌で飲みながら、彼の唯一の嗜好品であるキセルをふかす。因みに酒は嗜好品では無く、水であると言つのが彼の持論だ。

「……ご馳走様でした。えっと、美味しかったです。はい」

いつの間にか食べ終わった兎が、やはりちらちらと店主を盗み見るように見上げていた。

「お粗末様だ。あとこれ持ってけ」

ぽんつと兎の前に大きめの折り詰めが置かれた。

「へっ?」

「ああ、余った料理だ。お前、ちょいちょいこの辺来るだろ? 薬担いでうるうるしてるもんな? だからさ、きつと家族もいるんだろ? さ。遅くなった言い訳に土産持ってきな」

にやりと笑った店主はぶつきらぼうに言った。

「わ、わ、ありがとございます! あ、でもお代が足りないかも、

です……」

不安気な兎に店主は豪快に笑った。そして

「今日は俺の奢りだよ兎。しょっちゅうウチの店に入りたそうに眺めてたお前さんが、漸く来てくれた記念だ。ありがとうな？来てくれて」

そついつて不器用に片目をつむる店主に、兎は暫くぽかんと目を見開き、そして顔を真っ赤にして何度も頷いた。

兎は嬉しかった。

この見た目は冷淡にも見える少女は、その実ひどく臆病なのだ。

されど内気ながらも寂しがりやな性格から、他人と関わりたくとも自分から踏み出せない難儀な性質だ。

薬師を営む師匠の手伝いで時折人里にやってくる少女は、帰りしなに見かける屋台にいつも笑い声が絶えないのを知り、自分もあの輪に入れたらなと思っていたのだ。

だが、性格とは中々かわれない。

そして兎はいつも屋台を眺めては寂しそうに帰っていくのだ。

「あの……鈴仙です」

「んん？」

「えと、その、私の名前、鈴仙です。兎ですけど、鈴仙なんです」
少女は確りと、真つ赤な目を店主に向けた。

「そうかい、鈴仙。俺は次郎だ。宜しくな？どっかの腐れ巫女みたいにオヤジ呼ばわりは許さんぞ？」

そしてまた不器用に片目をつむる店主だった。

「……ふふっ、わかりましたジロさん。私も兎呼ばわりは許さん、です」

「あはは、お前さんも言うね？ ま、次からは金とるからまた来てくれ。さっ、遅いから帰んな？」

二人で少し笑いあい、そして鈴仙は帰っていった。土産を胸に抱えて。

こうしてある日の屋台の一日は終わるのだった。

「おい、鈴仙！」

「はいつ!?!」

歩きだした背中に店主の声飛び、びくりと身体を揺らす鈴仙。

「必ずまた来いよ？」

「……………はいつ!?!」

笑顔が弾けた。

つづく

登場人物

次郎と言う名の店主

人格者の寺子屋の女性

霊夢と言う名の腐れ巫女

胡散臭い魔法使い

鈴仙と言う名の兎

ある兎の話（後書き）

うどんげ可愛い。ウサミミにブレザーなんて卑怯だと思います。

心の隙間、埋めますか？

宵の口、人里の外れにある屋台では、無愛想な店主が黙々と仕込みをしていた。

ここは「喰いものや」

妖し達が集う不思議な屋台である。

東方御伽草子

この喰いものやを営む店主である次郎は、人里の住人からは変り者と呼ばれている。というのもこの幻想郷と言う場所は、人間が圧倒的に弱者である。

次郎はそんな人間にとっては物騒で世知辛い土地で、好きこのんで妖し相手に店を開いているのだ。

寺子屋の女主人が次郎を「正気の沙汰ではない」と称したのも頷けると言うものだ。

次郎自身は一切の自己主張をしない上に、鳥や野菜類は自給自足し、僅かな足りない物を人里にて買う程度だ。必然的に人里とは疎遠になる。

次郎はただ、寡黙に仕込みをし、当たり前前に店を開くのみであった。淡々と。

すっかり日も落ち、人々が家路につく頃には、次郎の仕込みも佳境に辿り着いていた。その日使う肉の下拵え、作りおきの煮込み等、出来るだけこまめにそれは行われる。

何せ従業員はいないのだ。次郎が一人で全てを取り仕切らなければならぬ。故に仕込みで料理の手間を七割がた終わらせておくのである。

そして今日の仕込みも滞りなく終わらせ、次郎は一人満足気な溜息をついた。

「次郎様、もう開店してるのかしら？」

一段落して一服つけていた次郎に、闇の中から鈴の音のような声が響く。

「ふん、どうせタイミング見計らってたのだろうに。まあ座んな、隙間の」

キセルをかん、と叩きつけ火種を飛ばすと、次郎は虚空を見た。

屋台の淡い灯りの向こう側にある暗闇に、更に深い漆黒が開き、無数の目玉が散らばった。その中から異国風の帽子をかぶった、少女

の様でそれでいて全てを達観したような人形然とした美貌の女性が現れた。

八雲紫、隙間の妖怪と言われる幻想郷の管理人たる大妖怪であった。

「ふふっ、客に言う台詞では無くってよ？次郎様。そこが貴男らしくていいのだけれども。ではお任せでお願いするわ」

口元を扇子で隠しながら、少女たる姿に妖艶さを撒き散らし、八雲は席につくのだった。

次郎は伝法な口調ではあるが、それでも手早く肴を身繕い八雲の前に並べた。彼女の好きな濁り酒を添えて。

八雲はその細い喉をこく、こく、と鳴らし、冷えた濁り酒を嚙下していく。そして、ふうと一息つくくと次郎に微笑した。

「おいし。ねえ、この肴はなあに？」

「もやしを炒めて卵を絡めただけだ。お前さん、いつも疲れた顔をしているからな。女が必要な栄養はもやしに沢山入ってるんだとよ。黙って食え」

目だけで微かに笑いながら、次郎は八雲に講釈を垂れた。

「あは、この幻想郷で私を女扱いするのは貴男だけよ？だって、歳だけは誰より上だもの。口の悪い吸血鬼に言わせると婆ですってよ？」

芝居掛かった口調で八雲はおどけると、少し”しな”を作つて次郎を見た。

「女の年の話は御法度つてな。あんたは充分に女だよ。下らねえこと言つてないで飲んで食え」

「あら、うれし。口説いてくださるのかしら？」

「……阿呆が」

鼻で笑つた次郎がまた一品八雲の前に置く。今度は鶏肉を湯がいて薄く切り、山葵醤油を添えた物だ。

「大体な、八雲がくる日は決まつて他の客がきやがらねえ。お前さんが怖いらしい。だが、まともに金を払ってくれる客もまたお前さんくらいなもんだ。つまりは憎たらしい上客様を俺は逃がす訳にはいかんだよ。忌々しい事にな」

ぷつとキセルを吹き、新しく葉を詰める次郎だったが、僅かに笑っている。彼もこのやり取りが万更でも無いようだ。

そんな次郎の無骨な優しさに、八雲はやはり扇子で顔を隠しながら”芝居掛かつていない”笑みを浮かべるのだった。

夜露が暖簾を濡らす。

十六夜の月が真上に浮かんでいる。

「……次郎、聞いてるの？もう、みんな私の苦勞をわかつてくれな

いの。でもね？でも、私はこの幻想郷がだ〜いすきなのお。だから頑張るのお。こら次郎！聞いているのかぁ！」

「あいあい、聞いてるよ。紫は大変だね。偉いね。うんうん」

「次郎！やい次郎！！あなただけよ……ちゃんと構ってくれるのは……ぐすっ……ぐすっ……むにゃ……」

「……泣きながら寝るなよ面倒くせえ。やれやれ、風邪ひくぞ」

ひとしきり愚痴を垂れた八雲は酔い潰れ、突っ伏して寝てしまった。そんな彼女に次郎は悪態をつきながらも、自分が羽織っていた藍色の絞りの着流しを彼女の肩にかける。

猫の毛のようにしなやかな金色の髪をちらばせ、僅かに紅がひかれた薄い唇を半開きに眠る八雲。今の彼女には妖艶さも強かさも消え失せている。ただの疲れた少女でしかない。

そんな彼女の姿を眺められるのも役得かもしれないと思案する次郎だった。

「……………眠ってしまったようね」

ふと目を覚ました八雲が呟いた。

「……………そうだな」

「これ、次郎様の着流し。ふふっ、いい匂い」

「……阿呆が」

目は覚めたが瞳は少し虚ろな八雲が次郎の着流しを抱き締める。

「……なんで？」

「ん？」

「なんで優しくするの？貴男少しおかしいわ？」

「今度は絡み酒か？」

片方の眉を器用に上げながら次郎が溜息をつく。

「……貴男、恨み言ひとつ言わないじゃない！責めなさいよ！私を責めたらいいじゃない！この人さらいって！」

急に激昂した八雲が次郎の胸ぐらを掴む。次郎に唾を飛ばしながらいきり立った彼女は自分を責めると慟哭する。

「責めてよ……責めて欲しくて通ってるのに」

やがて力なくへたりこんだ八雲。涙で汚した次郎の襟をつかんだまま。

「……責めて、どうにかなるのか？」

「だって!!」

「……黙れ。あれは事故だ。事故は不幸だが誰も悪くは無いんだ。

ぐぐぐだいつまでもガキみたいに自分を痛め付けるな」

「……………だって」

妖しである八雲紫の力、『境界を操る程度の能力』はあらゆる境目を曖昧にし、自在に操ると言うものだ。

この幻想郷とは、博麗の巫女による大結界により外から隔絶されている。そして、八雲紫の境界を操る能力により中と外を行き来してバランスを保っているのである。

妖し、幻想の生き物、それらは全て人間がいてこそ存在しうるのだ。

人間が夢想し

人間が恐怖し

人間が言む。

光があるなら影が存在できる。人間が光ならば、その影が幻想なのだ。

だが人間は自然の理の序列では弱くとも、それを補って余りある知識と知恵がある。それは人間の生活を豊かにし、そして自然の理を歪にってしまった。

最早人間に自然への潜在的な恐怖は皆無となり、ある意味互いに共存関係であった幻想の生き物は必要無くなった。

脆弱で一人で立つことも覚束ない生き物だった人間は、今や何一つ不自由無く立ち、空すら支配した。

全ての”くびき”から独立し、星の王者たる人間。ある意味それは妖しよりも化け物然としており、本来の化け物は役割を失った。

つまり幻想は真の意味で幻想となり、その産物たる妖しは役目を無くす。

後に待つのは滅びだ。

八雲はそれを是とせず、幻想郷を作った。

妖しを集め、古来からの自然を受け容れる人間を集め、小さな箱庭を作った。

それは一つの世界であり、森羅万象であった。

それは八雲紫の独り善がりたる産物かもしれない。

だが彼女は愛しているのだ。理解はされなくとも。

だから八雲紫は境界を操るのだ。忘れ去られようとしている外の存在を引き込むために。

ある日八雲紫は外の世界にいた。ある妖しを保護するために。そして、実際に引き込もうと隙間を開いたその刹那の話だ。

妖しが隙間に落ち、安堵した八雲紫が見たものは、驚愕に目を見開き隙間に消える人間の姿だった。

最早作業でしかない八雲紫の仕事は、それ故に油断していたかもしれない。

だが、嘆いても遅かった。予定の無かった人間の男は、間違いなく隙間に落ちたのだから。

慌てて追い掛けた八雲紫が見たものは、幻想郷の上空から落下して、ばらばらに飛び散るはずの惨状 ではなく、地面に叩きつけられる寸前に気絶したまま何らかの能力を発現させた男の姿だった。

男は気絶したまま地上約一メートルに”浮いて”いたのだ。

呆然とそれを見つめる八雲紫だったが、それはある事実を示していた。

それは、巻き込まれてここにいるこの不幸な男が、もう外の世界には帰れないと言う事柄である。

はからずも幻想郷の存在を知ってしまい、なおかつ、外の世界で幻想の産物でしかない超自然的な能力を発現してしまった男。

それ故に幻想郷の管理者たる八雲紫は、自らの責任と幻想郷の秩序の為に男を縛り付けた。男の意志がどうだろうと、だ。

だが、男は受け容れた。残酷で不条理な運命を。

搾りだすように苦々しく語る八雲紫を真っ直ぐ見つめ、一言も言葉

を発しなかった男は、彼女がひとしきり語り終えた後にこう言ったのだ。

「宜しくたのむ」と。

そして、色々ありながらも今に至り、男は何となく幻想郷に溶け込み、八雲紫は罪悪感に苛まれていると言う訳だ。

「……俺は、お前さんを恨んじやいないよ。俺は向こうじゃクスだった。情性で生きて、霞みたいなもんだったよ」

ぼつり、ぼつりと次郎が語る。八雲はそれを無言で見上げる。

「だから、何も無かったんだよ。俺と言う存在は。……そうだな、確かに不幸過ぎる出来事だったのかもしれない。だが、俺は今こうしてだ、何となく幸せだと感じてる。だから、いいじゃねえかそれで」

次郎の独白を夢遊病のように見上げる八雲。縋るような視線。打算かも知れない、だが八雲は待っている。ある言葉を。

くしゃっ

その時次郎の節くれた手が八雲の髪を撫でた。

「……だから、許すよ。俺は八雲を許す。そして、新しい人生をくれたお前さんに感謝する。ありがとうな、八雲」

八雲の目が大きく見開かれた。待っていた。欲しかった言葉を次郎は発した。

「許す」と。

「あつ、ああつ、次郎」

縋る八雲。

「……阿呆が。もう看板だ。帰れ帰れ」

しっしつと手を払う次郎に、八雲は失礼ねと形の良い眉を八の字にする。そして小さく呟いた。

「ありがとう」と。

そんな八雲を尻目に黙々と片付ける次郎。それをにんまりしながら彼女は残りの酒を呷る。

そしてすっかり片付いた屋台を眺め、満足そうに次郎は頷いた。

「……まだ居たのか。とつとと帰れよ」

「ええ、帰るわ?」

すっかり正気を取り戻した八雲は、扇子で口元を隠して笑っていた。
”芝居掛かった”笑みで。

「……お前、ちよつ、何企んでやがつ!!!?おわあああああ!!!

！ちつくしよおおおお………」

次郎の足元に隙間が開き、彼は呪咀と悲鳴をあげながら消えていった。

「ふふつ、まだ飲み足りなくてよ次郎」

静寂

登場人物

次郎と言つ名の店主

八雲紫と言つ名の妖し

名も無き妖し

心の隙間、埋めますか？（後書き）

相変わらずの駄文ですいません。リハビリですからご勘弁を。

今回は八雲紫でした。この人すごく好きなんだけど、二次作品ではやたらと婆扱いか、お姉さんキャラで描かれる事が多い気がします。

そして、人さらいとか、フィクサー的なポジションが多いですよ。でもたしか幻想郷に来る存在って、外で忘れ去られようとする存在なんですよ、たしか。

個人的には永夜抄までしかやってませんが、どうみても少女にしか見えないので、この作品の設定としては「精神年齢は見た目に起因する」と言う前提で書きました。

可愛いからいいんです、はい。

僕は某動画サイトで人気のあるアレンジ曲や、大手同人屋とかには興味は無く、単純に東方の力オスな世界観が好きです。

東方のどうしようもないB級感がたまらないのです。チープなSTGに不思議な世界観、まあ、Normalをひいひい言いながらクリアする程度の能力なヘタレですが。

まあそんな感じで、あまり二次作品のステレオタイプに引っ張られないように書けたらなと思ってます。

中々難しいですが…。

裏設定

すっかりタイミングを失った、主人公紹介

名前 次郎

容姿 短髪黒髪高身長。痩せ形で三白眼のこわもて。x x x H O L
i C の百目鬼をイメージして下さい。（分からなきゃググレ）

過去 無作為に惰性で生きてたらしいが詳しくは不明である。

性格 基本的に無愛想。無口。ただ、たまに語る。たまに笑う。

仕事 幻想郷の人里の外れにて、喰いものやと言つ名の屋台を営む。
料理や酒は美味いらしい。種類は多国籍でその日の仕入れと次郎の
気分で変わる。

能力 八雲紫しか知らないが、何らかの能力があるらしい。いずれ
語られる…かも知れない。

さあ、次は誰出そうかな…

最強の泣き虫

幻想郷の人里の外れ、妖し達が集う屋台がある。名前は「喰いものや」

そこは毎晩笑い声に溢れ、普段は反りが合わない妖し達が触れ合うと言つ。

これは、そんな屋台を営む男が織り成す不思議な物語である。

東方御伽草子

幻想郷にある名物屋台の店主である次郎は、夜明けと共に畑の世話をしていた。

茅ぶき屋根のこじんまりとした一軒家が次郎の住みかである。その庭一面に次郎の畑があった。

綺麗に耕され丁寧な作られた畑は、次郎の几帳面な性格を表しているようだ。

「ふう、腰が痛いな」

野良仕事着の次郎は、長時間腰を曲げていた辛さから、天を仰いで腰を叩いている。但し顔に笑みを浮かべながら、だ。

ひとしきり作業が終わり、次郎は畑の端にある石窯に火を入れた。

この窯は次郎が山から運んできた石を積み上げて作った、彼自慢の自家製石窯である。

彼が幻想郷にくる前には怠惰な生活をしていたと言う。そんな彼が何故にこんな立派な窯が作れたか？ それは彼の能力の恩恵であった。

彼の能力、それは”くつつけたり離れたりする程度の能力”である。

この能力は次郎の視界にある物を、文字通りくつつけたり離れたりを任意にする事ができる。

くつつける　どんな物も溶接したかのように癒着、圧着、融合させる。

離れる　どんな物（自分の身体含む）も任意に切り離す。切断できる。自分自身を地面から離す、つまり浮く事も含まれる。

と言う訳で、かなり汎用性に溢れ、応用が効きやすいと言える。

対象が生物と考えたら、とても恐ろしい効果を発揮するだろう。ただ、次郎は今のところは生活の中でしか使ってはいない。

ある意味物騒な能力であるからこそ、八雲紫は次郎を縛ったのかもしれない。

閑話休題

窯に火を入れた次郎は、そのまま井戸で汗を流し、寝起きに仕込んでいたパン種の発酵を台所に確認しに行く。

「ん。頃合いだな」

発酵を確認した次郎は手早く成型し、焼き上がりを思ってニヤニヤしながら窯にむかうのだ。

しっかりと温度が上がった窯に次々と成型したパン種を並べ、鉄の蓋をする。

満足そうな次郎は、焼き上がりまでの時間を窯の前で過ごすらしい。とにかくこうして彼は毎朝パンを焼くのが日課なのだ。

次郎は丸太に腰掛け、やはり自作の煙草盆を引き寄せ、キセルに火を付ける。

この時間こそが次郎の至高の時なのである。

初夏の涼しげな風が次郎を吹き付け、鳥の声に耳を傾ける。自然と目を閉じ、ゆっくりとした時間の流れを噛み締める。

「 幸せだな、俺は。八雲に感謝だ」

誰とも無くそう呟いた次郎であったが

「やあ次郎、おはよう」

「次郎さん、ご相伴に与りに来たよ！」

そんな静寂を次郎は許されならしい。

「おはよう、慧音、妹紅。このハイエナ共め」

「あつはつは、そう言うな。お前のパンが美味しいのを恨め」

「そつだよ次郎さん、あなたが悪い！」

「けつ、惜きゃがね。まあ後少し待ちな。おい妹紅、締めた鳥は台所な？」

「ありがとな、次郎さん」

次郎の庭に入ってきたのは、人里の顔役で寺子屋の主人の上白沢慧音とその親友の藤原妹紅である。

慧音は次郎がこの家を借りる際に世話になり、妹紅は次郎の店の常連であり、たまに次郎が育ててる鶏を買っていく関係だった。妹紅の焼き鳥は絶品である。

「うっん……たまらないな、この香ばしい薫り」

「幸せになるね……」

恍惚と涎を垂らす二人の女性を生暖かく横目で見ながら、次郎は釜

を開けた。

中からは黄金色に焼けたパンが現れた。

「ほら、焼けたぞ。一人二個までだからな！」

お預けを食らった犬の如く、食い入るようにパンを見つめる二人に、次郎はやれやれと言う表情で言い放った。

大小様々のパンは、だいたい二十ほどあるだろうか？それを次郎は次々と籠に入れていった。

「ねえ次郎さん？四角いやつは無いの？」

妹紅が言う四角いやつとは所謂食パンである。次郎は毎日違うパンを焼くのだ。

「今日は無いな。この細身のがバゲット、太目がバタールだ。ほれっ！」

次郎は説明しながら二人の口に焼きたてパンをちぎって放り込んだ。

「むぐむぐ……」

「あむあむっ……」

リスのように頬を膨らませて一心不乱に咀嚼する姿が愛らしい。

「う、うまい……」

「だろっ？バゲットはかりかりに焦げたのが最高なんだ。さて、朝飯作るから食ってけ」

「次郎〜愛してる〜」

「……はいはい」

調子の良い欠食児童を放置して、次郎は台所に消えていくのだった。次郎の人里の住人との関わりは稀薄であれど、こうして彼を慕う人間は微々たるならがにいるようだ。やはり妖しの類いであるのだけれども。

次郎は手早く身仕度し、焼き上げたパンでサンドイッチを作った。半分は三人の朝食として消え、また半分は彼の弁当に化けた。

彼は大きめの厚い布で出来た背負い鞆に荷物を詰めると、二人に別れを告げて魔法の森へと歩いていくのだった。

次郎は数日に一度、徒歩で行ける範囲にある野山に入る。それは畑では得られない山の恵みを手に入れるためである。

この季節は初夏であるから、山菜の類いは時期が悪い。そこで最近「は店の常連である」胡散臭い魔法使い”の勧めもあり、魔法の森にてキノコを狩っている。

魔法の森は一年中キノコが生えている。但し、その大半は所謂毒キノコに分類され、中には爆発したり、身体に変化を及ぼしたり等とおよそキノコの範疇を越えた効果を発揮するものもある。

これらはまさに幻想郷たる由縁とも言えるが、幸い次郎はいい意味でかつての常識は捨て去っている為、特に慌てたりはしない。

胡散臭い魔法使い曰く、「色が薄めのキノコは食べれる」とのアドバイスを受けたが、残念ながら次郎はそれを信じたために一週間もの間、肌が緑色になるという快拳を成し遂げた。

以来、彼の新たな常識として、魔法使いのアドバイスは信じないと言うものが加えられた。まあ、某人形使いや、某図書館の住人等はいい迷惑であろうが…。

何れにせよ次郎は自力での試行錯誤の末、外の世界で食べたような安全なキノコの選別は完了している。自身の犠牲を持ってであるが。

閑話休題

そんなわけで次郎は現在、新緑萌える森の木漏れ日を浴びながら歩いていた。

魔法の森は、まるで太古からそこにあつたような儼かな佇まいでそこにあつた。次郎が昔、図鑑で眺めたような景色がある。

その中を次郎は、気持ちよさそうに進んでいた。

今日、彼が求める獲物は、向こう側でいうエリンギに似たキノコで、歯応えのある美味なキノコだ。

それを縦に割いて細くしたものにパン粉で衣をつけて揚げたものが、現在次郎の屋台で一番人気の肴となっている。

残念な事にそのエリンギもどきは群生しておらず、次郎はあっちこっちと彷徨うようにそれを狩っていく。そんな手間も”おつ”であると感じるのが、彼の幻想郷での生活が満足のいくものであるのを示している。

そうしてキノコを狩りながら魔法の森を抜けて湖にたどり着く頃には、彼の背負い鞆はキノコでパンパンに膨らんでいた。

次郎はいつも森を抜けると、湖のほとりに腰掛け、対岸に見える場違いな紅色の館を眺めながら一服つけるのがお気に入りだった。

本日もご多分に漏れずそうしようと、やはりお気に入りの巨石の椅子を目指して歩いていたのだが、何故か今日は先客がいた。

次郎がふと立ち止まり眺めた先には、巨石の上で膝を抱える、水色の小さな妖精がいた。

「やあ、こんにちは」

ひとまず次郎は挨拶してみる事にした。早く一服したいという本音もあるが、その妖精の佇まいに打ち拉がれた印象を受けたからである。

「…………人間があたいの縄張りに何のようだ…………」

やはりなにやら覇気が感じられない。次郎の印象として、妖精とは悪戯好きで奔放な生物なはずだ。次郎は「ごめんよ」と一言断り、水色の妖精の横に腰掛けた。

「俺は次郎と言った。君は名前はなんて言うんだい？」

「……あたいはチルノ。さいきよーの妖精さ……」

チルノと言う妖精は、膝を抱えて俯いたままそう言った。

次郎は「そうか」と呟き、弁当を開いてサンドイッチを頬張った。湖を吹き抜ける風が心地よい。

気が付くとチルノは、ちらちらと次郎を窺っていた。だが彼は敢えて気が付かないふりをして、自慢のサンドイッチを淡々と咀嚼していく。

「食べるか？」

「……いいの？」

「……いいさ」

次郎はチルノの顔ほどもあるサンドイッチを彼女に渡した。彼女は無言でそれを両手で抱え、小さな顎を一生懸命動かして食べた。

彼女は口いっぱいに頬張りながら、やがてポロポロと涙を流しはじめる。泣き声は必死で堪えながら。

「うまいか？」

「……まあまあね……つく……少しは……ひっ……おいしい……」

「そうか、嬉しいな。それは俺の手作りなんだ」

そしてまた、二人は無言でサンドイッチを頬張る作業に戻った。

「チルノは何故泣くんのだ？」

「泣いてない……ぐしゅ……」

次郎はキセルに火を点け、紫煙をくゆらせた。立ち登る煙は、あっという間に湖に吸い込まれた。

「あたい、嫌われたんだ。大ちゃんも、リグルも、ミステリアも、ルーミアも、みんなあたいを嫌いになっただ……」

ぐしゅと鼻水を垂らしながらチルノは呟いた。

「そうか。どうしてそうなったか分かるのか？」

「……あたいが……あたいが我儘言ったから……ぐしゅ……だと……ぐえっ……思っ」

次郎はキセルに葉をつめ直し、また火を点けた。

「お前は寂しいのか？」

こくこくとチルノは何度も頷き、ぼたぼたと涙が落ちた。

「なら簡単だ。魔法を使えばすぐ元通りだな」

「へっ?…まほー?」

「そつだ。さいきょーじゃなくても使える簡単な魔法だ」

次郎は初めてチルノに視線を向けた。

「知りたい!ジロー、あたいたい知りたい!」

「そつか、じゃあ特別に教えてやる」

チルノが次郎を見上げ、期待の籠もったような、縋るような目で見ている。

「それはな……」

「それは!?!」

次郎はニヤリと笑った。

「ごめんなさい、だ」

「へ?」

「ごめんなさいと言えばいいんだ」

チルノは俯いて唇を噛んだ。

「……許してくれるかな？」

「怖いか？」

「……怖い」

「チルノはさいきょーなんだろ？」

「あたいはさいきょーさ……」

「なら、大丈夫だ」

「……頑張ってみる」

次郎は立ち上がり、帰り支度を始める。

「帰るのか？」

「ああ。またな、チルノ。頑張れよ、さいきょーの妖精」

次郎はふわりと浮き上がり、ゆっくりと進んで行く。そして森の上にさしかかる頃

「ジロー！ありがとう！ジローはあたいの子分にしてあげる！またねジロー！バイバーイ！」

次郎はくすりと笑って森に消えた。チルノに笑顔が溢れた。

そんなある日の出来事だった。

登場人物

人里の顔役、慧音

焼鳥の名人、藤原妹紅

胡散臭い魔法使い

さいきよーの妖精チルノ

大ちゃんと言う名の妖精

リグルと言う名の蛭妖怪

ミスティアと言う名の夜雀

ルーミアと言う名の妖精

最強の泣き虫（後書き）

チルノっておませな姪っこみたいで可愛いです。

もこたんinnしたお

だけどまだモブだよ。

そのうちメイン昇格予定

礼儀の妙（前書き）

いっ
たい
何を
書き
たか
った
のか
が謎

礼儀の妙

この幻想郷には、夜中でも笑い声が絶えない風変わりな名物屋台がある。

その名前は「喰いものや」

店主は無愛想だが、料理と酒は上等と評判だ。常連客はみんな綺麗所らしいぜ。

おっとそこなお兄さん？鼻の下伸ばすのは勝手だが慌てちゃいけねえよ。

何しろその常連客ってえのは、どいつもこいつも怖え怖え妖しだつてんだ。

料理食いに行つて逆に喰われたら世話もないわな。

度胸があつたら行つてみなあ！

東方御伽草子

秋も深まり、薄着では歩くのが難儀な寒さの幻想郷。今年は豊穣の神様もご満悦なほど、人里は豊作の慶びに沸いていた。

人里の名物屋台の店主、次郎の畑も同様に豊作であった。根菜類が山のように収穫できた様で、普段あまり笑わない彼が畑の真ん中で微笑んでいた。

収穫されたものが料理になった姿でも思い浮かべているのかもしれない。

「ふう、こんなところかね」

次郎は掘り終えた里芋とサツマイモの山を振り返り呟いた。さらに視線をずらし縁側を見れば、鶏肉の礼だと妹紅が獲ってきた丸々とした丹波栗が山盛りになっている。

そんな和な光景を眺めていた次郎は、ふと思索の海に落ちた。ある日の記憶が蘇る。

次郎が幻想郷に来る前、彼はいたって普通のサラリーマンであった。そして機械仕掛けのブリキの玩具のように、決まった動きを繰り返す毎日であった。

地方都市の普通の家庭に生まれた次郎は、一生をこんなつまらない田舎では暮らしたくないと、東京の大学へと進学した。

その大学生活の中で彼は彼女に出会った。

花のように笑う彼女に次郎は夢中になり、まるで自分が別人になったような錯覚を起こす程、世界が薔薇色に見えた。

彼と彼女は当たり前のように恋に落ち、当たり前のように口付けをかわし、そして当たり前のように体を契った。

熱病のような恋がいつしか愛にかわった。それは互いが互いを半身であると思える程に。

二人は将来を約束し、次郎が就職して数ヶ月たった頃、彼女は身籠った。

次郎は身体いっぱいには喜びを表し、そんな次郎を見た彼女は「子供みたい」と揶揄したが、瞳から溢れる涙はやはり喜びに彩られていた。

その日の夜、二人は裸で抱き合いながら、改めて幸せを噛み締めあった。そして、未来の予定を語り合う。結婚式はここであげよう、ハネムーンは海外がいい？引越もしよう、あの店で見たソファを買おう。

しかし、それは何一つ叶わなかった。それは彼女の定期検診の時に見つかった、彼女がまだ見ぬ子供かの選択を迫られる病巣のせいだった。

二人で血を吐くほど悩み相談した。だが、最後は彼女に半ば押し切られる形で子供を選択した。

それ以降、次郎は毎晩彼女の頭上に命が燃え尽きる時間が見え、最後は0になり絶望する夢を見るようになった。

次郎にとって彼女は全てだった。情けないくらいに愛していた。

頼む神様、いるなら助けてくれ！俺の命をくれてやる！だからあいつと子供を助けてくれ！次郎は毎日そうやって見たこともない神に縋った。

そんな彼の祈りも虚しく、臨月も近いある日、残酷な神は彼女も子供も奪っていったのだ。

急変だった。

あまりに呆気なく、母子は天に還ってしまった。

次郎は以降、酒で身体を痛め付け、毎晩狂ったように自堕落に過ごした。

死ぬ勇氣すら持てず、ただ自分を騙した。酒に溺れ、女に溺れ、夜毎彼女の幻影にすがりついた。

そんな生ける屍となった次郎は、気が付くと二十代が終わる間近になっっていた。

空虚に支配された次郎が、彼女の月命日に郊外の集合墓地に向かう道すがら

隙間に落ちたのだ。

「でも、どうやら俺は幸せらしいよ。……子、俺、こんな訳の分からない土地だけど、ちゃんと生きてるよ。お前と子供の分ま

で長生きするからな」

次郎はそう呟いた。縁側から眺める、幻想郷の素晴らしい山並みを見ながら。

こんな気分になるのもきつと秋のせいだなと、次郎は自嘲しつつ煙管に火をつけるのだった。

「……誰だい？」

さりげなく目尻の涙を拭きながら次郎は不粋な客に呟いた。

「……次郎様、我が主の命にて、貴方をお迎えに参りました」

次郎が声がする方を見ると、そこにはこの田園風景に似つかわしくない使用人服姿 所謂メイド服の娘が立っていた。その口調は丁寧ではあるが、どこことなく尊大な印象であった。

次郎は軽く首を振りながら溜息をついた。

「……まずお前は誰だ。そして主の名は？名乗りもしない得体の知れないやつについていく馬鹿はいない」

「失礼しました。私は十六夜咲夜と申します。以後、お見知りおきを。そして我が主の名はレミリア・スカーレット、紅魔館が主にして夜の盟主ですわ」

「……俺は次郎、しがない屋台の店主だ。以後、お見知りおかんでもいい」

次郎はぶつきらぼつに言うと、咲夜など居ないかのように煙管に葉を詰めた。

「……………次郎様、返事は？」

「返事？ いったい何の？ …… ああ、お前さんの主とやらが呼んでいるって話か？ こう見えて忙しいんだ。 また出直してくれ」

「そうですか、では仕方ありません……………」

次郎の拒否に対し咲夜の周りの温度が下がった。 否定など許さない
そういう事なのだろう。

彼が一瞬まばたきした間に、何をしたのか咲夜は消えていた。 いや、
正確には……………

「……………返事は？」

次郎の首筋に銀色の刃が当たっていた。 どういうからくりか、咲夜が
次郎の後に回っていた。 そして彼の耳に唇を寄せ、咲夜が囁いた。

「ははは、こちらの都合はどうでもいいと。 なるほどな、紅魔館の
主とやらはどうやらただの下衆らしいな？」

次郎は首筋のナイフなど気にも留めずに言う。 彼は穏やかな口調な
がら、その心中は怒っていた。 穏やかに亡くなった妻との思い出に
浸っていた時間を邪魔したのだ。

「……………黙れ」

咲夜のどすの効いた呟きと共にナイフが次郎の首筋き赤い線を引き
た。

「……次はかつ切る。返事は？」

「……後悔するなよ」

次郎が呟いた。

次の瞬間、咲夜のナイフが根元から折れた。彼女があり得ない光景
に一瞬呆然とした。その間に咲夜は庭に転がっていた。次郎が咲夜
の髪の毛を掴んで投げたのだ。彼の指にはごっそりと銀色の髪が掴
まれたままだった。

咲夜は混乱していた。何が起きたのか？次郎は一切動いては居なか
った。

地面に這いつくばったまま咲夜は考えた。だが、その後頭部を容赦
なく次郎の足が踏み抜いた。彼女は意識を失った。

次郎が屋台を出店するまでに、実は二年の間準備していた。八雲紫
の隙間にて幻想郷に入ってから、彼はしばらく何もしていなかった
のだ。

慧音から空き家を世話してもらい、手荷物の中からいくつか道具屋
で外の物を売り払い、決して安くは無い金を得た。

彼はそのまま自堕落な生活を続けていた。惰性で生きていた次郎は、
幻想郷にきたとて無気力だった。心に開いてしまった穴は、容易に

は塞がらない。

次郎は酔い潰れて縁側に倒れながら、答えの出ない答えを探していた。そしてある時、彼は山に消えた。

人里では奇妙な噂が流れていた。近くの山で惨殺された妖しの死体が大量に見つかったと言う。その死体は、小間切れにされていたと言う。

あまりの凄惨な姿に、山に入った里の人間は嘔吐感に苛まれたと言う。サイコロ状に刻まれた肉塊を見て。人間の天敵である妖しが駆除された喜びより、この狂気じみた光景を里の人間は嫌悪した。

そう、次郎の仕業であった。張り合いの無い毎日、もう戻らない日々。幻想入りした事で尚更浮き彫りになった孤独。それを身に染みて改めて理解したのだ。

最初は妖しに喰われてしまえと山に入った。大木によしかかり、静かに捕食者が来るのを待った。

やがて現われたのは巨大な狼のような妖獣だった。それは舌を垂らし、牙を剥いた。食事でありつける歓喜に身を震わせ、それは野生を剥き出しにして次郎に飛び掛かった。

次郎は不思議な光景を見た。踊りかかるそれが、真っ赤な口腔内を露にして自分に近寄っている。それを彼は見ていた。

コマ送りで

死を意識したせいだからか、所謂走馬灯と言う現象なのか、とにかくその鋭い牙が次郎の柔らかい首筋に食い込む瞬間　　それを彼は感じていた。

肌に牙が触れ、沈み、今まさに次郎の生命を刈り取るその刹那……

何かが次郎の中で爆発した。

彼から獣のような咆哮が生まれ、そして何かが降ってきた。

それは血であり肉だった。細かく小間切れになったその肉塊だった。

赤黒く染まりながら彼は叫んでいた。死にたくない！と。この時に次郎と言う”存在”が幻想に産声を上げたと言える。

以来、彼は一年近く森で生きた。獣と言う獣を殺し、幻想郷で生きる術を手に入れたのだ。つまり、自分自身の能力を効率よく使う方法をだ。

幻想郷で生きるとは弱肉強食の理を受け入れると言う事だ。次郎は受け入れたのだ。そして、能力を全て理解した彼は山を降りた。

そして幻想郷に”生きる”一人の存在として、次郎はここにいた。何人も自分の尊厳を犯すことは許さないと言う覚悟を胸に抱えて。

だらしなく横たわる咲夜を見下ろす彼の目は冷たかった。

ふと咲夜は目を覚ます。辺りは既に暗く、見えない。彼女は鈍く痛む頭痛を振り払い立った。

「お目覚めかい？メイドさん。早く帰ってくれないと仕事に行けないんだが」

咲夜が声のするほうを見ると、縁側には次郎が座っている。但し纏う空気は冷たいままだ。

「……あなた、一体何をしたの!？」

はだけた衣服を直しながら咲夜は言う。若干発する言葉の語尾が震えているのは虚勢だからなのだろう。事実、次郎の得体の知れない不気味さに、彼女の冷静さは消えていた。

「それをお前さんに言う必要性はないな。後はなんだったか……うーん、弾幕とか言うお遊びだったか？それに付き合う気もないな」

次郎は暗がりから咲夜を見据え、にやりと笑う。彼女は息を飲んだ。下手な事をすればこの男は自分を殺す。そう感じた。

「ずっと考えてたんだ。お前さんの力は何だつてさ。隙をついてお前さんを投げ飛ばした時を考えたら　殴りあいには並以下だろうさ。ならお前さんの動きは　」

咲夜は唾を飲み込む。肌着を濡らす汗が忌々しい。この男は危険過ぎる。

「時間を止める…かな？まあ、どうでもいい。無礼な人間にはやり方ってものがある」

咲夜は驚愕する。能力を言い当てられたからだ。種の割れた手品は滑稽だ。完璧で瀟洒と言われたメイドは、今や丸裸のただの女となった。

一步、また一步と次郎が咲夜に近づいてくる。咲夜はじりじり後退り、敷石につまづき尻餅をついた。

「やつ…やめっ…たすけっ…」

咲夜に翳される次郎の手、彼女は思わず目を閉じた。抗う気も失せるほどこの場は次郎が支配してた。

「なんてな？」

「へっ？」

にやりと笑った次郎が、咲夜の頭をポンと叩いた。咲夜は鳩が豆鉄砲を食らったような顔で惚けている。

「なんでお前さんの主が俺を呼んだかは知らない。ただな、無礼はいけない。少なくとも理由を聞けば俺だって考える。　と言う事でお仕置きは終了って訳だ。んっ？」

けらけらと愉快そうに笑う次郎に、拗ねたような顔で咲夜は不貞腐れた。

「貴方は「次郎」……次郎さんは酷いです。主より怖かったですわ」

「ま、そういうな。取り敢えずはすっきりしたからいい。んじゃ俺は屋台があるから出掛けるわ。咲夜…だっけな」

そういつて腰を上げた次郎に追いつがる咲夜。

「あ、あのっ……」

「ん。どっちにしろ今日は無理だが、明日の晩でも出向くから迎えに来てくれ」

「はい、必ずお迎えにあがりますわ。それと……今日は大変ご迷惑をおかけしました」

咲夜は素晴らしい姿勢で頭を下げた。そこにいたのは完璧で瀟洒なメイドそのものだった。次郎は手をひらひらしながら庭を出ていこうとしていたが。

「そうだ。お前さんの主に今日掘った里芋、持ってってくれ。今日行けなかった詫びだ」

咲夜は頭を下げたまま、「はい」と答えた。

今宵の月も鮮やかだった。幻想郷の秋は深まる。

登場人物

屋台の店主、次郎

栗を持ってきた妹紅

完璧で瀟洒なメイド、十六夜咲夜

咲夜の主

礼儀の妙（後書き）

咲夜さん登場。別に嫌いな訳じゃ無いです。むしろ好き。ただ、好きな子は虐めたくなるだけです。

つか東方で嫌いなものってムカつく二次設定な八雲紫くらいです。うちの紫は可愛く書きます（笑）

今後は各陣営とまったり絡ますつもりですが、今回紅魔館まで行けなかったのが残念です。

可愛いおぜうを書きたかったのに。

うー 的なおぜうは書かないけどネ。やはりおぜうにはカリスマ（笑）は必要です。

では次もまったり頑張ります。

夜に生きる者（前書き）

おおしげ

夜に生きる者

「なあ次郎、お前は何考えているんだ？もう少し里の人間と交わったらどうだ？今のままじゃ皆がお前を気味悪がっている……」

手酌で日本酒をやりながら、里の顔役である上白沢慧音が諭すように言う。

「ふむ……慧音、お前さんは俺をどう思ってるんだい？」

相変わらず面倒臭そうに話す次郎。彼もまた手酌でやりながら、自慢のキセルでぶかりと煙を吐く。

「いやっ、私はその……好きだぞ？次郎が……」

何を血迷ったか慧音は頬を真っ赤に染めた。

「だってよ？妹紅」

「へっ？」

気が付くと慧音の後ろにはいつの間にか妹紅が立っていた。その表情はにやにやと意地の悪い笑みを浮かべていた。

「……慧音、私との事は遊びだったんだな。不毛な女より、やはり男のぬくもりが堪らないんだね？どうしよう次郎？遊ばれちゃったよ私……」

ぷるぷると肩を震わせ顔を伏せる妹紅。

「慧音、お前さん教育者のくせに両刀使いか……この外道があ……」
追い討ちをかける次郎。

「いや、そんな……ちがつ……私はそんなふしだらな真似はっ……妹
紅！私は軽い気持ちでお前のそばに等……なんで二人とも笑ってる
！？」

次郎と妹紅は声にならない笑い声で震えていた。いや、むしろ痙攣
していた。

「いやあ慧音よ。お前さんはからかい甲斐のあるヤツだな？くくく
っ」

「慧音えお腹痛いっお腹いた〜い……くふっ……」

涙すら流しながら笑い転げる二人だった。

「貴様ら……乙女の純情を弄びおって……許さん」

今の慧音はまさに阿修羅。背後に怒りのオーラを纏っている。

「ちよっ……慧音っ……冗談だつて、ね？」

「そ、そつだぞ？ちよつとしたお茶目だ。ほら、そんな顔したらお
前さんの可愛い顔が台無し」

「黙れお前らあ！指導お！指導お！」

激しい炸裂音と共に、慧音の頭突きが二人を襲う。

「洒落に…なら…ん…」

「不死身でも…痛いものは…痛…い…」

無様に崩れ落ちる二人だった。慧音はどっかと座り込み、深酒を決め込んだ。幻想郷の夜はこれからだ。

東方御伽草子

騒がしい客で溢れる次郎の屋台は、今夜も繁盛していた。相変わらず妖し相手の商売であるが、この表情豊かな人外達が次郎は好きだった。

「鈴仙、今日は師匠のお使い帰りか？」

先日の一件から、永遠亭の住人である月の兎、鈴仙・優曇華院・イナバは「喰いものや」の常連になった。

「お使いって子供じゃないんですから！お仕事の帰りです！」

「そうかそうか。ほら、甘い卵焼きだぞ」

「わっ、甘い、美味しいです次郎さん！」

ぴーんと優曇華の耳が伸びる。余程気に入ったらしい。

「……………子供じゃねえか」

「むう……………いいんです！卵焼きに罪は無いんです！」

兎の鈴仙は頬を膨らませながらも卵焼きを頬張る。毎度毎度次郎にからかわれながらもやってくるのは、存外このやり取りを気に入っているのだろう。

「すねるな。ほれ、お茶」

「……………ありがとうございます。ふう、ふう、あちち……………」

鈴仙は下戸だったようだ。

「ジロ！この樽でいいの？」

「お、ご苦労さん。それで大丈夫だ。裏に賄い用意してあるから喰いな」

「ありがとジロ！間違わず持ってこれるあたいたら最強ね！」

「おつおつ最強だぁ。とつとと飯食ってこい」

「ふふ〜ん」

そういつて突然現れた青く小さな妖精は消えていった。

「あれっ、次郎さん今の小さいのは妖精ですか？」

きよとんとした鈴仙が驚いたように言う。

「……ああ、あれは一応従業員なんだ。チルノって言ってな、妙に懐かれちまったんだ。毎日のように自宅に突撃してくるから、上手いこと言い含めて従業員にしたってわけだ」

なんだか疲れたように次郎は語る。人に言えないようなエピソードがあるらしい。

「こういつてはなんですが、計算とか任せたら……」

「……はあ……言うな」

「が、頑張つて下さい！次郎さん！」

憐れんだように鈴仙は次郎に声援を贈った。妖精があれなのは幻想郷の常識らしい。

「ありがと鈴仙、そういつてくれるのはお前さんだけだ……よし、その耳で癒しておくれ……」

「へっ？、いやっ、じじじ次郎さん！？そんな破廉恥なっふわわわわわわ……」

有無を言わず鈴仙の耳をいじり倒す次郎に、真つ赤になりながらもどこか諦めの表情で鈴仙は触られている。一番奥の席に座っていた慧音と妹紅がそれを生暖かく見ている。慧音が若干悔しそうなのが謎であった。今宵も食いもんやは繁盛している。その時

「次郎様、お迎えに参りました」

客からは陰になる柱の横に、完璧で瀟洒の二つ名に違わない紅魔館のメイド長、十六夜咲夜が完璧な礼で次郎を見ていた。彼は小さく頷くと、手早く土産替わりの惣菜を包み、前掛けを外した。そして裏でもぐもぐと賄いをパクつく従業員を一瞥し、深いため息をついた。

「……慧音、妹紅、少し出てくるから店番頼めないか？今日の飲み代タダにしてやるから」

「「やるっ!」「」

次郎の言葉が終わらないうちに二人は満面の笑みで答えた。現金な物である。

「チルノ、出かけてくるから飯食ったら今日は上がっていいからな」
頬をぱんぱんに膨らませているチルノは声を出す事は叶わず、必死にこくこく頷いている。

「じゃ行こうか咲夜」

そうして二人は、静かに闇に溶けていくのだった。

次郎は一度自宅に戻ると咲夜を表に待たせた。暫くして次郎が現れると、彼女は控え目に嘆息した。それは、次郎は黒いタキシードに花束を抱えていたからだ。そして次郎は土産をお重につめ直し、鮮やかな紅色の風呂敷に包んだ物を咲夜に持たせると、彼女に行くぞと促した。但し花束だけは大事そうに抱えたままだ。

「……………次郎様、どうしてお召しかえを？」

咲夜の問いかけはある意味当然と言える。彼女が見た次郎と言う人物は、顔立ちは端正であるが、寡黙で融通の利かない御し辛いと言う印象だからだ。その上腕っぷしは咲夜を軽く捻る程である。彼女がいつもの如く、力技で言う事効かせようとした結果は、彼女自身が自信を消失する程の手並みであった。ならば、客人の礼を欠いた咲夜とその主であるレミリアに対して良い印象を持たないと思うのが自然だ。

「ん？お前さんもおかしな事言うね？せつかく招待されたんだ、汚い格好で行けないだろ？」

何を馬鹿な質問をと言いたげな表情で話す次郎だった。

「で、ですが、昨日私は次郎様にご無礼を働きましたし……………」

「はあ…お前さんも面倒な性格してるねえ。確かにお前さんは無礼だった。けどまあ、そいつはきちんと落とし前ついたらだろ？ならもう手打ちでいいだろうさ。少なくとも俺は、紅魔館とやらに行くのを楽しみにしてるんだぜ？」

そう言うと次郎は片目をつぶってみせた。

「分かりました。でも、やはり昨日は申し訳ありませんでした。これ以上は申しませんが、今一度言わせて頂きました。それと、あなたにウイソクは似合いませんわ？」

次郎の言葉に一瞬笑顔を見せた咲夜だったが、すぐに表情を消すと皮肉で返してみせた。どうやらわだかまりは消えたようだ。二人は連れ立って闇夜の空に浮かんで消えていった。

夜空を並んで飛んでいく二人に、霧に噎ぶ湖の畔に立つ洋館 紅魔館が見えてきた。次郎はモノトーンの景色の中で唯一自己主張をしている紅き洋館に、思わずほう、と嘆息した。それを横目に咲夜は誇らしそうに胸を張った。控え目に、であるが。

次郎がここまでの道すがら、咲夜に説明された紅魔館とは、吸血鬼であるスカーレット姉妹と、姉で館の主であるレミアアの親友、パチュリー・ノーレッジ、門番の紅美鈴、そしてメイド長である十六夜咲夜が住人として住んでいると言う。

紅魔館には地上の居住部分と、とある理由で部外者は近寄れない地下部分があり、そしてパチュリー・ノーレッジが書斎のように住まう大図書館と言うエリアがあると言う。

これらの説明を咲夜が次郎にしたのは、客人である彼の安全の為だという。というのは紅魔館に住まう住人全て”少々”気難しい者達であり、客人と言えど普段のペースを変えない住人の気を損ねると無事に済まない懸念があるからだと言うのだ。

普通に考えればおかしい話なのであるが、それが通るのが幻想郷と
言う事なのだろう。因みに咲夜が紅魔館のメイド長として、名実共
に全てを取り仕切っていると云う件りでは、無表情な彼女には珍し
く得意気な表情で語って見せた。

紅魔館の門前に降り立った次郎は、正面にある立派な時計塔を一瞥
し、視線を下ろした。そこには館を取り囲む鉄柵によしかかり、腕
組みしながら立っている美麗なる赤毛の女性が居た。

咲夜によると彼女が門番である紅美鈴であると言う。彼女は素晴ら
しいスタイルの持ち主で、顔立ちも秀麗である。鶯色のロングドレ
スのような出で立ち、腰まで切れ込むスリットは戦闘の際の機能性
の為だろう。頭にぼんと乗せられた帽子が、彼女の中の可愛さを引
き出しているようだ。

「……………行きますよ」

微動だにしない美鈴をじつと眺めていた次郎に、咲夜の何故か不機
嫌そうな声が飛ぶ。

「……………ああ」

次郎は頷いて正面玄関へと歩を進める。ふと後方から「さ、咲夜さ
ん、ねね寝てはおりませんひぎゃあ！！！！？」等と言う悲鳴が聞こ
えた気がした次郎だったが、敢えて気にしない事にするのだった。
理由はとばかりは嫌だからだ。

そうして二人は館に入り、外観からは想像もつかないほどの長い廊下を進んでいく。やがてそれも終点となり、重厚な木目の扉の前に次郎は立った。咲夜は次郎を制し扉に声をかける。

「お嬢様、お客様をお連れ致しました」

「……お入りなさい」

咲夜の声に、凜とした館の主であろう女性の声が響いた。

「次郎様、中へどうぞ。主がお待ちです」

咲夜が扉を開き、腰を曲げる。次郎は広間を進み、正面の玉座に座る少女の前に立った。

アンティーク調の木製の玉座に座る紅魔館の主、レミリア・スカールレットは美しかった。ブルーサファイアの髪、血の色のような深紅の瞳、桃色の薄い唇から見え隠れする鋭利な犬歯。少女のような体格とは言え、その身からあふれ出る覇気は、流石に館を束ねる者の威厳に充ちている。そのアンバランスさが逆に彼女の妖艶さを引き立てている。

「よく来たわね、歓迎するわ？人間。私がこの館の主、レミリア・スカールレットよ」

レミリアは次郎の目をじっと覗き込みながら淡々と言う。次郎はそれを真正面から見返し、意味ありげに微笑すると軽く会釈した。

「ご招待頂きまことに感謝します。ご所望頂いた人間でございます。こちらは庭に咲いた名も無き花です。それではさようなら、吸血鬼

のお嬢さん」

次郎は張り付くような笑みを絶やさぬまま、花束をレミリアに渡し、さり気なく鼻で笑うと踵を返し出口を目指す。戸口に控えていた咲夜が青ざめた表情で次郎を見ている。

レミリアは非常に困惑していた。

彼女は人里で一際有名な人間、次郎に興味を抱いていた。それはこの幻想郷と言う異質な空間で、殊更異質な妖し相手に堂々と商売をする人間を見てみたいと願ったからだ。

彼女は孤独だ。パチュリーと言う親友はいるが、それ以外に彼女と対等に話せる友人などいない。

吸血鬼と言う種族は長命　いや、その身は既に生命活動を維持していない以上、魂と肉体が朽ち果てない限り不死である。だが、永遠を生きるとは孤独であると言う事と同義である。

見知った者は何れ死に別れる。それ故に孤独なのである。彼女は齢五百才を越えた辺りだが、既にいくつもの別れを経験している。

だからこそ、彼女から見て刹那の年月しか生きれない人間にある種の羨望を感じるのだ。短い人生ながら、濃密な生涯を必死に生きるそれは長命種には出来ない事なのだ。悠久を生きるために希薄になる生き方。それは仕方ない事なのだ。だからこそレミリアはそんな人間の話を聞きたいと願うのだ。

だがレミリアは誇り高き吸血鬼であり、この紅魔館の当主である。まして吸血鬼にとって人間とは食材である。持ち前のプライドの高

さと、捕食者が非捕食者の人生に興味を持つと言つジレンマ、それがレミリアの態度に露骨に出てしまったのである。

彼女は次郎の瞳を覗き込み、吸血鬼の特性である”魅了”の魔法を使い、彼を傀儡にしようとした。だが、彼には一切の効果も現れなかった。魅了の魔法はいかに対象の精神力が強くとも、魔法に耐性かなければ抗う事は出来ない。

しかし次郎には動揺する素振りすら見せなかった。故にレミリアは困惑する。

「ま、待ちなさい！無礼は許さないわ、人間！」

思わず飛び出したレミリアの罵声、それは本心と言うよりは狼狽からでたものかもしれない。しかし戸口で足を止め、振り返った次郎の顔を見たとき彼女は後悔した。何故なら彼の顔になんの表情も浮かんではいなかったからだ。

レミリアの心を支配したのは恐怖。見知らぬ者を見たときに浮かぶ潜在的な恐怖だった。吸血鬼を前に平然と我を通す人間を彼女は知らない。

「吸血鬼のお嬢さん、俺は見せ物じゃあ無いんだ。俺が招待に応じたのは、お嬢さんの面子を潰したと感じたからだ。だがそれは俺がここに来たことで義理は果たしたはずだ。お前さんは俺を人間と呼んだ。だから俺はお前さんを吸血鬼と呼ぶ。礼を尽くせない人間関係に発展は無い。だから俺は帰るだけだ。気に入らなければ殺せばいい。だが俺は死んでもお前さんには屈伏しない」

次郎はつかつかと玉座に歩み寄り、レミリアの耳の横に荒っぽく手

を突き、接吻せんばかりに顔を突き合わせたまま言い放った。

レミリアは人間ごときに圧倒された屈辱感と同時に、この物怖じせず自分に道徳を叩きつけるこの偉そうな人間に好意を抱くという相反する感覚に混乱をしていた。目が泳ぐ。だが目は離せない。これは一体なんなのか？レミリアは恐慌に陥った。

咲夜ははらはらと経過を見ながらも、何故か次郎を止めなかった。いや、止めてはいけない気がしていた。自らの名付け親にして愛しい主、その人の為に敢えて静観するという選択をしたのだ。

「……さい……」

鼻先が触れ合う距離感の中、レミリアはじつと次郎を睨みながら何かを呟いた。

「……なんだって？」

首をかしげながら次郎がさらにレミリアを睨む。

「……るさい……」

レミリアの瞳は最大に開かれ、やがて何かが盛り上がり、そして零れる。

「……るさい！うるさい！うるさい！うるさい！何よ人間のくせに生意気よっ！何さ！と、と、友達になりたいだけなのに怖い顔してっ！何よ！何よ！」

ぼたぼたと涙を零しながらレミリアは絶叫する。次郎は一瞬たじろ

いだ表情をしたが、すぐに無表情になると彼女に話しはじめた。

「咲夜に持たせた芋は食ったか？」

「……………??…美味しかったわ？」

「じゃ感想を言ってくれなきゃ寂しいだろうが」

急に穏やかな口調になった次郎に困惑するレミリア

「今日は色々調理したのを持ってきたんだ。楽しみか？」

「う、うん、楽しみ…かもしれない」

二人の背後で咲夜は主の愛らしさに必死で笑いを堪えている。

「この花は喜んでもらえたかい？」

「え、ええ、素敵よ」

「俺の名前は次郎」

「私の名前はレミリア」

「素敵な名前だな。レミリアに似合っている」

「あ、ありがとう…」

咲夜は笑いを堪えているのが困難になり、自らの能力で刻を止めると、声を上げて笑い転げた。完全に手玉に取られおろおろする主。

あんなレミリアを見たのは初めてなのだ。咲夜は次郎に自由にさせて正解であったと思った。あの尊大で自尊心だけが高い、協調性の欠如した主の成長の為に。そして刻は動き出す。

「何か言うことあるか？レミリアお嬢様」

次郎が初めて自分の名を呼んだ！レミリアは許されたのかもしれないと安堵する。今や自尊心はどこかに消えていた。

「ご、ごめんなさい次郎……ただ友達になりたかったの……でもやり方がわからなくて、ごめんなさい次郎、ごめんなさい」

つい、と次郎の親指がレミリアの涙を拭いた。体温がほとんど無い彼女の涙は冷たい。

「じゃ、仲直りだな。俺も恐がらせてごめんなさい。レミリア、今度店に来てほしい。」友達”だからな、次は俺が招待するよ」

すつ、とレミリアから体を離し、次郎は彼女の前に胡坐をかいて座った。背の高い次郎が、彼女の目線に合わせたのだ。

「ありがとう次郎。招待は喜んで受けるわ。だって……友達なもの
そういつてレミリアは伏し目がちに笑った。心からの笑顔に次郎も笑った。

「じゃ、また遊びにくるな、レミリア」

軽く手を振り腰を上げる次郎。

「ええ、必ずまた来てね次郎。お店も必ず行くから」

そうして二人は晴れて友人となり、この不思議な夜会は幕を閉じたのだった。

玄関で咲夜が感謝を示し、そんな彼女に「お前も友人だろうか？」との次郎の返しに酷く狼狽したのはまた別の話である。

次郎は頭に何故かナイフが刺さった門番を一瞥し、闇の中に消えていった。

屋台に戻った次郎は絶句した。

「なあ、これはどういう事だ……」

呟いた次郎に答えるものは誰もいない。何故なら店を任せた二人とチルノ、胡散臭い魔法使いにろくでなし巫女、角を生やした鬼の幼女が意識を無くして倒れているからだ。

次郎は深いため息をつき、改めて倒れ伏した馬鹿野郎共を見やると更に深いため息をついたのだった。

次郎は全てからになった酒樽に座り、こいつらをどっつやって痛め付けるか思案するのだった。

登場人物

紅魔館の当主、レミリア・スカーレット

完全で瀟洒なメイド、十六夜咲夜

レミリアの妹

紅魔館大図書館の住人、パチュリー・ノーレッジ

紅魔館の門番、紅美鈴

人里の顔役、上白沢慧音

慧音の親友、藤原妹紅

胡散臭い魔法使い

霊夢と言う名のろくでなし巫女

喰いものやの従業員、氷精のチルノ

角を生やした鬼の幼女

夜に生きる者（後書き）

裏設定として、次郎はこの幻想郷で生きてくには充分過ぎる能力を有しています（詳しくは前話）

ですが彼は戦闘も弾幕にも関わりたくない普通の人間です。が、自衛のためには行使することを躊躇しません。

前回は咲夜を圧倒し、今回はおぜうさまを圧倒しました。

次郎の能力は「付けたり離したりを操る程度の能力」です。これは解釈次第ではいかようにも幅が広がる汎用性溢れる能力です。

咲夜のナイフを切り、レミリアには魅了の魔法の効果を切って見せた。

レミリアが本気で殺しにかかれば次郎も危なかったでしょうが、礼を重んじる次郎の気迫に場は支配され、おぜうさまは自分を見失いました。

ま、そんな感じですよ。

次郎は異変には関わりません。それは博麗の巫女の仕事だからです。次郎は酒場の親父として巫女からその話を聞くことはあれど、関わりはしません。能力があれど酒場の親父に過ぎないからです。

さてこの駄文ですが、興味がある方は感想を頂けると嬉しいです。
あと、自分の嫁出してとかの要望も受け付けます。

では

ナナツボシ

風邪っぴきとは心細きもの

何やら外が騒がしい。昨夜も相変わらず寝たのは朝方だ。雨戸から射し込む朝陽の加減を見ると、どうやら二時間も眠れていないようだ。

昨日は山ほど焼いたから、今日はパンを焼く事も無いし。畑は白菜を植えおわった。つまり、寝坊しても問題無いのだ。だから現在何者かがしつこく叩くノックは無視しよう。そうだ俺は何も悪くない。それでは皆様さようなら、お休みなさい……。

「起きろ次郎っ！……！」

うるさいな、俺はまだ眠いんだ。ほっといてくれ。

「起きろってば！」

しつこいな。誰だよ馬鹿野郎。俺は夜中まで働いてた労働者なんだよ。勘弁してくださいよこの野郎。そうだ、こいつも寝かせてしまえばいいのだ。所謂共犯者に仕立ててしまえばいいのだ。えいつ……。

「ちよつ、次郎、やめつ、何するっはあう、朝から破廉恥うああ……」

むむっ？何やら柔らかくいい匂いだな？むむっ？むむっ？凄まじく柔

らかいな。これはいい抱き枕だ。むしろ顔を埋めたい、いや埋めよう……。

「ひゃうん！ やっ、じろ、やめっ、だめええ！ 助けてもこーーー！ っ！！！！！！」

なんだよ五月蠅いな。俺はこの素晴らしく柔らかい枕は離さないぞ。断固拒否だ。む、また誰か入ってきやがった。だが俺は意地でも起きないぞ！

「どうした慧音？ って次郎何やってんだ！ 何て羨まし…ちがっ…慧音変われ…じゃなくて、起きろっ！」

「ギヤアアアアア！」

ギヤアアアアア！

「私まで燃やすな妹紅！」

殺す気か妹紅！ 起こすのに妖術使うな！ だが、悪いがこの枕は離さないからな！ 絶対に！

「……次郎、よく見ろ…その枕は何処にある……」

何処って慧音……枕は……むっ？ 胸ええ！？

「そうだ、私の胸だ。よくも好き放題揉みしだいてくれたな……。妹紅は自分の胸見ないっ」

俺が慧音の胸を揉む？

「そつだ。妹紅、いくら見てもどつにもならん
と云うことは？」

「そつだ」

ちよつとしたお茶目じゃないか。ははは

「ははははははははは

で済むかあ！！！天誅うううっ！！！！！！」

そうして俺は慧音の頭突きで、物理的に二度寝へと移行したんだ。

東方御伽草子

「お前ってやつは本当にどうしようもない奴だ。いくら寝呆けていたとは言えだ、曲がりなりにも乙女のむ、む、胸を揉みしだくなんて常識の欠片も無いぞ？」

私のこの豊満な胸に興味を持つなどは言わない。だがな？親しき仲にも礼儀ありと言うじゃないか？ならば、私とお前の仲だとて、やはり段階を踏むべきなんだ。分かるだろう？男女の手順とはこうあるべきと言う段階の事だ。そ、その、わわ、わたっ、私を好きだ等の告白をだな、経てから閨を共にすべきなんだ。そうとなれば私も鬼ではない。むしろ吝かでも無いと言うかそのう……。だあゝ！！つまり、いきなり不埒な真似はいけなめと言う事だ！分かったな？次郎！！」

現在、次郎の自宅の居間では、ぼろぼろに焼け焦げた寝間着姿の次郎が巨大なたんこぶを拵えて正座していた。そしてその前に慧音が座り、既に小一時間は説教をしている。妹紅はいい加減飽きてしまったのか、勝手に茶筴筒を開けて茶菓子を食べていた。

「なあ、慧音。俺は今、お前の胸を寝呆けて揉んだ件で怒られているんだよな？あれ、間違ってるか？」

ぐったりとした顔の次郎は、かなり面倒臭そうに言った。

「そうだった！お前の破廉恥な所業を咎めてるんだ」

何やら偉そうに頷きながら慧音は言う。

「と言う事はだ、お前さんの話を纏めると……いきなり揉むのはいけない。だが、手順を踏めば問題ない。この場合、俺が慧音を好きと言う意思表示をしたなら問題は発生しない。そう聞こえたぞ。なら言おう、俺はお前が嫌いじゃないし、むしろ好きだ。だから好きだけ揉ませてくれ」

次郎は真顔で言い放つ。

「なななななっ！！何を言うのだお前はっ！！すすすっ好きとか言うな！ははっ恥ずかしいじゃないかっ！！！！」

瞬間湯沸器のように一瞬で赤面した慧音が慌てふためき後ずさる。

「なあ妹紅、俺、変な事言ったかなあ？」

「ん〜？別に变じゃ無いでしょ？慧音の説教とやらのままだったぞ。と言うか次郎さん、私はどうだ？髪は白いが中々の器量よしだと思っけど」

話を振られた妹紅は、にやにやしなから次郎にしなだれかかった。

「確かに妹紅は美人だな。そういう観点で考えたら、なるほど、吝かではないな」

次郎は腕組みしながらうむうむと頷く。

「妹紅……私に喧嘩を売っているようだな」

「慧音、どさくさ紛れに抜け駆けしたのは誰だ」

何やら次郎を挟んで不穏な空気が辺りを包んだ。

「表へ出る！妹紅」

「後悔するなよ慧音」

不敵な笑みを浮かべた二人は、油断無く睨み合いながら外へと消えるのだった。

「……………で、一体何しに来たんだよお前ら」

次郎の呟きが虚しく響くだけだった。

ずずず……、静かな居間に茶を啜る次郎がいた。寝起きの濃い緑茶は目覚めを豊かにすると彼は考えている。ただ、外に生きていた時は根っからのコーヒー党だった次郎は、幻想郷に豆自体中々流通しないのが不満と考えていた。

「いつそ八雲にお願いしてみるかねえ……………」

栓のない眩きを溢し、苦笑いをする次郎であった。

「呼んだかしら？次郎様？うふふ……」

気が付くと次郎の背中に寄りかかる八雲紫がいた。

「お前さん、驚かすんじゃないよ。ったく、今朝はろくな事がないうふつ、八雲の、何か当たってるぞ」

「あててるの。やあね、次郎様ったら野暮はいいつこなしですよ」

「……阿呆が」

朝っぱらからそんな艶っぽい空気を醸し出していると　がらりと居間に通じる障子が開き……。

「ぐはっ……次郎さん……私が勝ったぞ……」

さらに

「ぶほっ……口惜しや……次郎……私は……諦めな……がくっ……」

血塗れの妹紅と慧音が這うように飛び込んできた。

「次郎さん、私に、勝利のご褒美を……」

吐血しながら次郎に手を伸ばす妹紅。血の涙を流して悔しがる慧音。そして渦中の次郎は……。

「血塗れの人はちょっと……ごめんなさい……」

「「がくつ……」」

二人は意識を失ったのだった。

「次郎様、これは一体なんなのかしら？」

余りの惨劇に呆れ顔の八雲紫が言う。

「いや、なんかしら用があったらしく、さっき叩き起こされたんだ。そして気が付いたら二人で喧嘩をおっぱじめたって訳だ」

「で、用って何かしら？」

「さあ……」

首をかしげる次郎と八雲紫であった。

「そういや八雲の。ときにコーヒーは手にはいらんかな？最悪苗でも構わないが、とにかくコーヒーが飲みたいんだ」

「そうねえ、人里の道具屋で極極稀に見かけるけど、幻想郷では栽培してないわ。うーん、コーヒー位なら何とかするわ」

「すまん。礼は何でもするさ。コーヒーの為だ」

「うふふ……じゃ、どんなお礼を貰うか考えておくわ？楽しみねえ」
妖艶な笑みを浮かべる八雲紫に、思わず失言だったかと肩をすくめる次郎であった。

ややもして、八雲紫はとうに帰り、太陽は随分と登った。次郎は七杯目の茶を湯呑みに注ぎ、煙管に五回目の葉を詰めた。

「お前さんら、そろそろ起きないかね？」

呆れ顔の次郎が仲良く気絶している二人に呼び掛けた。

「「はっ!?!」」

「やっと起きたか……」

むくりと起き上がった二人は惚けたような顔で座っている。

「ほら、渋い茶だ」

「すまない」

「ありがと次郎さん」

しきりに首をかしげながら、次郎が出した茶を啜る二人。きっと先ほどの出来事を忘れているのだろう。次郎はしてやったりである。

「で、結局何しに来たんだお前さん達は」

「む、なんだっ……!?!?…そうだ次郎、博麗の巫女が風邪で倒れたらしい。薬は飲んだらしいが、何せ懐が寒過ぎて餓死しそうだと言う。すまぬが次郎、何か滋養に良いものを届けてはくれんか?何分私は

里を離れられなくてな……」

慧音が済まなそうに言う。確かに半妖の人里の顔役である慧音が、長い時間里を離れて何かあれば大事である。

「あのろくでなし巫女か……まあ、いいさ。つけも溜まつてるし様子見がてら行つてくるわ」

面倒くさそうに言う次郎だが、結局行くのが彼の奥床しさなのだろう。そうして散々大騒ぎした二人は仲良く帰って行くのだった。

次郎は思案する。博麗の巫女の事だ。彼女は次郎の店で飲み食いをするが、実は一度も支払いをした事は無いのである。たまに「次郎さん、お代は入れておいたから」と言いながらそそくさと帰っていくが、後から釣り銭箱を覗くと、そこには「博麗神社」とかかれた御札が入ってる。

初めて博麗の巫女が店にやってきた時の事を思いだし、次郎は思わず吹き出した。彼女が次郎に言った言葉とは

「ねえおじさん。私は博麗の巫女よ。お腹が空き過ぎて倒れそうなの！これも全て誰も賽銭箱にお金を入れてくれないからよ！だからおじさん、賽銭がわりに何か食べさせて！」

と、偉そうに彼女は宣った。その余りの言い分に次郎は腹を抱えて笑い、なら賽銭をくれてやると飯や酒を振る舞った。以来彼女は味

を占めたように通ってくる。最も、時折八雲紫が彼女のつけを払っていくのだが、巫女はそれを知らない。

とにかく次郎はこの破天荒な巫女を気に入っていた。八雲紫に聞いた話であるが、彼女は時折起こる”異変”と呼ばれる幻想郷の危機を解決し、外界と幻想郷を隔てる結界を維持していると言う。

だが、彼女自身の能力のせいで、誰からも浮いた存在だという。つまり彼女は、過酷な義務を背負いながら、孤独を強いられていると言えるのだ。

彼女を慕い、好意を抱いている存在がいても、気が付くと最終的にどこにも属さない彼女がいるのだ。

次郎はそれに同情はしない。何故ならそれは彼女自身が選択した道だからだ。だが、自分が何かしてあげるのは自分の勝手だと考えている。だから次郎は荷物を詰める。背負いきれない程大量の荷物を。

博麗霊夢は高熱で朦朧とした視界のなか、この額の心地よい冷たさはなんだと考えている。さらに脇の下にも冷たい手拭いがはさんであり、昨夜のような辛さは減った気がしていた。取り敢えず、眠ろう。何も考えたくは無いから。

「お腹すいた……」

彼女はふと目が覚めて思わず呟いた。なにせ彼女は昨夜から何も口にしてないのだ。

「食欲あるか。待つてな？」

彼女は何か聞こえたような気がしたのか、視線を左右に動かしたがやがて力尽きたように目を閉じた。

「おい、おきろ」

彼女の肩が軽く揺すられる。ゆっくりと目を覚ました霊夢の視界に次郎が映った。

「なんで…いるの？次郎さん……」

まだ熱が引かないのだろう、霊夢は荒い息をしながら目の前の次郎を見つめる。

「黙れ病人。口あける」

「なによっ…あむっ……やだ、おいし」

「擦った林檎だ。のど越しが気持ちいいだろ？」

何だか騒ぎそうな霊夢の口に、有無を言わず匙を突っ込む次郎。

「もすこし…たべる」

「そうか、食べる」

静かな和室に霊夢の咀嚼音だけが響く。彼女の視線は相変わらず次郎を見ないが、表情に陰はない。孤独を好む霊夢だとて、風邪で臥せていれば心細いのだろう。静かな時間だけが流れる。

「なんか、お父さんがいたらこんな感じなのかもね……」

ふと霊夢が呟いた。

「そうかも知れないな。俺は早くに両親と死別したから記憶には無いが、きっと親の温もりとはこういう時に感じるのかもな」

外の景色を物憂げに見ながら次郎は語る。霊夢の呟きは次郎の内面にある記憶を探る引き金になったようだ。

「私も両親の記憶は無いんだ。そっか、私たちは似た者同士だね、次郎さん」

霊夢は初めて次郎を真っ直ぐ見ると、少しだけ笑った。

「ねえ次郎さん。外に帰りたいつて思ってる？」

次郎は暫く思案する。

「いや、俺の居場所はここにある。屋台があつて、毎日似たような奴等が騒ぎに来て、その中に俺がいる。この先どうなるかなんて想像はつかないけれどな。でも俺は約束したんだ」

次郎は微笑し、霊夢を見た。その目は彼女が初めて見る優しい目だった。

「約束？誰に？」

「今は心の中にいる妻と、産まれてくる筈だった子供にさ。俺は幻想郷に来る迄、いや、来てしばらくは生きる事が地獄だった。神さえ呪ったよ。けど、幻想郷は優しくてなあ……いつの間にかちゃんと生きてみようと思ったんだ。ここで幸せになりたいって思ったんだ。……喋り過ぎたな。誰にも話してないんだ。内緒だぜ？」

次郎は照れたように笑った。

「へへ次郎さんにそんな歴史があつたんだ。風邪ひいてなんか得した気分よ。でも、心細かったから話し相手になつてくれてありがとう……」

照れ臭いのか、布団で顔を隠す霊夢だった。

「さて、少し元気になったな。うどんか卵粥どっちが食べたい？」

「うどん！」

「ようし待ってる。俺が台所いつてる間に着替えておけよ？流石に着替えは出来なかったからな」

「うん、わかった。おとーさん」

「……阿呆が」

こうして次郎は霊夢の熱が下がるまで甲斐甲斐しく世話をし、翌朝帰っていった。人は誰しも床に臥せれば心細いもの。それは博麗の巫女も例外では無かったようだ。

幻想郷のとある一日の出来事は、緩やかに優しく過ぎていったと言
うお話。

登場人物

博麗の巫女、霊夢

騒がしき隣人、上白沢慧音

騒がしき隣人、藤原妹紅

妖艶な隙間妖怪、八雲紫

風邪っぴきとは心細きもの（後書き）

なんか慧音妹紅の絡みが恒例になりつつある今日この頃、なんかこの二人好きなんですよね。

どうやら二人は次郎が気になるようですが、次郎はじゃれあう二人をからかっているだけなのかな？作者も知りません。

今回は霊夢が主役でした。シニカルな巫女の弱っている感じを書いてみました。カッコいい霊夢は皆さんの作品にお任せして、僕はひたすら日常のみです。

博麗神社に向かう途中、ルーミアに出会う話を書こうかな？とか思いましたが、それもまた皆さんの作品にお任せしました。そーなのかー。

次郎にヒロインが出来るとしたら一体誰なんだろう？いないか。キャラがオツサンだし。

時間はどうしよう。

白玉楼か永遠亭あたりの誰かを書こう。そうしよう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4962x/>

東方御伽草子

2011年10月21日10時01分発行